

《第 506 回(2023年10月12日)子どもの本の読書会記録》参加者:7人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4階集会室

『みんなえがおになれますように ちがうってすてきなこと』 うい/作, 早川 世詩男/絵, 松中 権/監修 学研プラス

10月の読書会では、『みんなえがおになれますように ちがうってすてきなこと』を読みました。小学生のういさんがトランスジェンダーについて知るために、当事者の方々にインタビューした内容をまとめたものです。4人の大人が、ういさんの素直な疑問にしっかりと答えてくれています。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●この本は導入だと思う。当たり前ってなに？と思うことが、この問題の原点。人それぞれに当たり前がある。生きづらい人はたくさんいると思う。当事者の人にもっと幸せになって欲しい。絵がイメージしやすくよかった。これが写真だと生々しすぎる。小学生が初めて触れるのによい本。もやもやしたものを抱えた子どもに伝わるという。

●自分の偏見と闘う本だった。社会の価値観も変わってきている。自分の偏見を捨てないといけない。多様性、個性を認めること、日本の社会全体で支えることが必要だと思った。トランスジェンダーの人たちがカミングアウトしなくてはいけないことがすでに当たり前ではない。多様性を共有できる社会になるといい。絵本で楽しく読めたが、深く考えさせられた。

●タイトルがすてき。ういさんが質問したいと考えたことを周りの大人が理解してくれることがすごい。関わる大人の態度で子どもの悩みも変わってくる。ロバート・キャンベルさんの「自分とちがう人の生き方、すがた、言葉をりかひする」(p.43)という言葉がすべて。この問題を学校の授業でも扱って欲しい。そして、こういう本が子どもに近いところであって欲しいと思った。

●自分と人は違うのが当たり前、個性は違うから面白いと自分で言っているが、難しい問題。大人から変わっていかないといけない。封建制度にしばられている人が多すぎる。島崎藤村の『破戒』もカミングアウトだなと思った。「人」そのものを受け入れたらいい。ういさんのような小学生がいるのなら、これからの世代は良い方向に変わっていくと期待したい。

●LGBTQの人たちのことを社会で考えるようになったのは、ここ10年くらい。いい方向に進んでいるとは思いますが、日本は同性婚が認められていない。少数派だからカミングアウトしないといけないなんて。子どもの頃から多様性に触れていたら、もっと良い社会になるのだろうか。男性・女性を意識しなくていい社会、お互いの違いを認める社会になるといい。

●昔にくらべて理解は進んでいるように思うが、日本ではいまだに同じことを良しとする考えが根強い。でも、それもみんなが知ることによって変わっていくのでは。まずは知ること。子どもはたくさんのことを吸収する。偏った考えが染み込む前に知っていれば、人と違うことは当たり前で、個性を尊重できる、人に優しい社会を作っていけるのではないかと思った。

●分かったつもりになっているが、考えが及んでいないことも多いと感じた。自分が思っている当たり前は本当に当たり前なのか。相手の気持ちを尊重し、思いやることが自然にできるようになりたいと思った。みんなで補い合って社会は作られているという考え方がすてき。SNSで繰り返される誹謗中傷もそう考えて少なくなればいい。

次回 11月9日(木)10:00~11:30 オーテピア 4階集会室

□『妖精にさらわれた男の子 アイランドの昔話』 W.B.イェイツ/作, N.フィリップ/編, 山内 玲子/訳 岩波書店